

# 豊明希望チャペル礼拝

2025/3/30

「地の果てのすべての者よ」

イザヤ書 45 : 22



先週から、NHKの朝のドラマで、「チョッちゃん」というドラマをやっております。1987年に放送されたものの再放送になりますが、これは、黒柳徹子さんのお母様の、黒柳朝(ちょう)さん(1910年-2006年 96歳)の生涯を描いたものです。

黒柳朝さんは、日本基督教団雪の下教会の教会員で、説教学者で牧師であった加藤常昭牧師のことを、ある時、鎌倉に住むようになった黒柳さんを訪ねて、お祈りしたら、初対面で、いきなり「先生のお祈り聴いていたらびっくりしちゃった。まるで人を殺しているような祈りをするものだから、この人どういう人だろうと思って目を開けてまじまじとお顔を見てしまったわ。」と言ってしまい、「でも、本当にそうね。私たち、心の中で人



を殺してしまっている者ね。」と修正したとかしなかったとか、ずいぶん天真爛漫なクリスチャンだったようです。



先週の、第3回の場面では、チョッちゃんのお母さんが、クリスマス集會に呼んだ一家が、母親が病気で来れないと知って、チョッちゃんとお母さんと訪ねて、教会で配布していたクリスマスプレゼントを渡すという場面で、医者である父親から、彼らはクリスチャンじゃないんだから、余計なことをしないようにと言われたときのエピソードを描いていました。

お嬢さん育ちで家事がなかなか出来ない母でしたが、彼らのために、お前たちには何が出来るのかと夫に問われ、「私は、家事1つ出来ないまま嫁いできました。」といいます。夫「知ってる。」母「でも、私には何も出来ないけれど、病人を見舞いして、祈ることが出来ると思っているの。」と言います。そこに、学校を出たら

何をするんだ？何も決めてないのか？と問われる娘のチョッちゃんも一言。「うん、

それでいいんでないの?」「私も、こういう両親から生まれたから、生まれたんだから、(音楽学校に進みたいと思っていたが言い出せなかった・・)間違いはないでしょ。」と念を押すのです。

「私は、家事 1 つ出来ないまま嫁いできました。」「知ってる。」「でも、私には何も出来ないけれど、病人を見舞いして、祈ることが出来ると思っているの。」

何も出来なくても、祈ることが出来ると言います。神を仰ぎ見て、神さまにお願いすることが出来る。たとい、距離は離れていても、むしろ、病人のところに直接臨んで、神さまが答えてくださると、クリスチャンは、知っているからです。

今日は、旧約聖書のイザヤ書の言葉。「**地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神だ。ほかにはいない。**」(45:22)を最初に読みました。

「**地の果てのすべての者よ。**」と言います。すなわち、地の果てに至るまでのすべての人々が聞くべきこととして、この聖書の言葉は、神は呼びかけています。ユダヤからみれば、日本は地の果てですが、その当時から、神さまは、日本の人に男語りかけると言っているのです。

何をよびかけているのでしょうか。それは、「**救い**」です。それは、苦しみからの救いであり、悩みからの救いであり、それは、命が失われようとしてるなら、その**命の救い**であり、たましいが、悲しみ、苦しみ、希望を失い、枯れ果てようとしているなら、その**魂の救い**であります。

そして、その魂、あるいは、私たちに、神さまは何を呼びかけているのでしょうか。それは、「**仰ぎ見れば救われる**」ということなのです。

仰ぎ見るという意味は、上を見るところです。

とりあえず、何でもいから仰ぎ見なさい。上を向きなさいと言っています。そこには神を見るのですが、それでも、この言葉は、字義通りに読めば、とにかく、上を見ろと言っています。下を見ているのではなくということです。

下。上ではなく、自分の手の届く範囲、自分の身の回りを見ているだけでは、問題は解決しないと言っているのではないのでしょうか。

解決しない、そんなときは、まずは、上を見たらいいと言っているのではないのでしょうか。金、生活の不安? 家族の悩み、自分の健康、病、手が、足が、内臓がと。しかし、そこから一旦目を離せと言っているのではないのでしょうか。



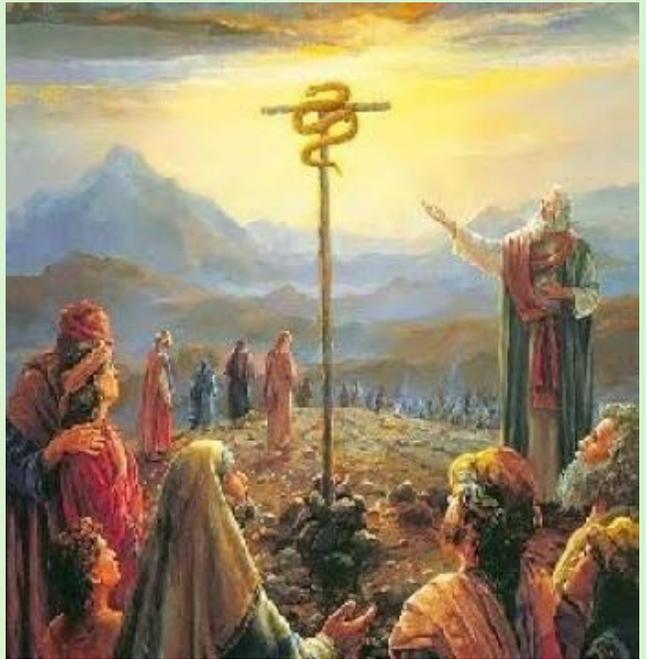


もしかしたら、自分がこだわり、捕らえられていた問題から目を離すことによって、見えなかったものが見えてくるのかもしれない。見えてくるのだということだと思わず。

「上を見る」なら、救われる。出エジプト記にこのような話しが出てきます。

出エジプト記は、エジプトに奴隷となっていたユダヤ人を、モーセが解放し、引き連れて、カナンの地に導く話しであります。

エジプトのはしからエルサレムまで、300



キロほど。数か月もあれば終わる旅を、なかなか終わることが出来ず、40年間、荒野をさまようことになりました。

それは、彼らが、エジプトでの豊かな生活を思いだし、今の生活と比較して、不満や不平が出てきたからだと言います。

人々は、旅のつらさに根をあげ、文句を言い始めます。不信仰の中で、神にたよろうとしない彼らに対して、砂漠で毒蛇に噛まれることを許されます。モーセは助けて欲しいと神に祈ります。その時、神はモーセに命じます。青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。それを仰ぎ見れば生きるといわれました。(民数記 21 : 8)

これは、キリストの十字架を指す型だとも言われます。私は、この時に、群衆に必要なことを思うとき、手もとの不安ではなく、天で私たちを見て解決をもって

おられる神にこそ目を上げることが必要だったと思います。人生の問題で、糸がほぐれず、ほぐそうとすればするほど、よけい複雑に絡み合ってしまうように、まずは、手もとの複雑な問題から離れて、目を上に向ける必要があったのだと思うのです。もっと極端に言えば、私は、上にあげられるものなら、何でもよかったのではないかと思っています。私が解決しようとせず、専門家にまかせると言いましょうか。人生の旅路を文句たらたらで送っている、その結果、かえって、自ら神の裁きを招いているのが人間の姿です。それを、上を見上げさせることによって、自分の力でなく、また指導者モーセに解決を求めることでもなく、天から期待する、神から期待する、そうすれば、それが応えられる。その事を学ばせるためだったと思うのです。



あることが示されました。

：2「**私の助けは、天地を造られた主から来る。**」

また、この詩篇の聖書の箇所では、このあと、神さまは、私たちにこのように言われます。

「**その方は、まどろむこともなく、眠ることもない。**」 (:4) からだと。私が、うっかり寝ている時にさえ、神は起きていて、一睡もしない、子を思う母親のように父親のように、私を、いつも見ていて下さると。そして、こう言われます。



：8「**主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。**」

ここまで、イザヤ書の言葉、「仰ぎ見れば救われる。」という言葉めぐって、見てきました。「地の果てまでのすべての人々よ。」と呼びかける、「**私は神。ほかにはいない。**」と言われる、天地万物を創った聖書の神、唯一の神の言葉を見てきたのです。

ス ポ ル ジ ョ ン ( Charles Haddon Spurgeon, 1834年6月19日 - 1892年1月31日) という牧師の話をしようと思います。牧師の息子でした。しかし、彼はクリスチャンになれない、神を信じ切れないでいま

した。彼の自伝から、少し、彼の証をお話ししたいと思います。

彼は、クリスチャンになりたいと願いました。ただ、信じるだけで救われるという聖書の教えがどうしてもスツと腹の底に落ちてこないのです。もし「背中をめぐって50回ムチを受けろ」といわれれば、前に飛び出して、どうぞ好きなだけたたいて下さいと言ったであろうに。そして、きっと救われたのに。と思います。英国中端から端まで歩け。そうすれば、救われると言われたら家にも帰らず即座に出発しただろうと言います。

しかし、聖書は、私達に告げています。

十字架にかかったイエスキリストを信じなさい。私達の罪を贖うために十字架にかかり、そう、ちょうど荒野でユダヤの人々が青銅の蛇を見上げたように、十字架を見上げるなら、神を、キリストを見上げるなら、救われる。と。

これが、出来なかったと彼は言うのです。そして、彼が、本当に救いを得たと確信した聖句こそ、今日の、このイザヤ 45:22 でありました。



「ある日曜日の朝、神が恵みによって吹雪を起さなかったなら、私は今も暗闇と絶望のうちにいたかもしれない・・・それは、私がある礼拝所へ向かっているときのことであった。その朝は、牧師が来なかった。おそらく雪に閉じ込められていたのであろう。とうとう、大層やせた体つきの、靴屋か仕立屋か、そうした類の職業と思われるひとりの人が、講壇に立って説教を始めた。聖書箇所は、イザヤ書 45:22「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ」

[イザ 45:22] 説教者は口を切った。「みなさん。これは実に単純きわまりない聖句です。これは『見よ』と云っています。さて、見ることにさほど苦勞はいりません。見る勉強をしに大学へ行く必要はありません。どんな馬鹿でも見ることはできます。この聖句は云います。『わたしを仰ぎ見よ』、と。そうです!」、と彼は強いなまりで云った。「あなたがたの多くは自分を見ているが、そこを見ても何の役にも立ちません。あなたがたは決して自分自身の中に慰めを見いだすことはないでしょう。イエス・キリストは、『わたしを仰ぎ見よ』、と云われます。キリストを仰ぎ見なさい。この聖句は云います。『わたしを仰ぎ見よ』、と」。そして云った。「わ

たしを仰ぎ見よ。わたしは、血の汗のしずくを流した。わたしを仰ぎ見よ。わたしは十字架にかけられた。わたしを仰ぎ見よ。わたしは死んで葬られた。わたしを仰ぎ見よ。わたしはよみがえった。わたしを仰ぎ見よ。わたしは天に昇った。わたしを仰ぎ見よ。わたしは御父の右の座についている。おゝ、あわれな罪人よ。わたしを仰ぎ見よ！ わたしを仰ぎ見よ！」ここに至って彼は、10分かそこら話を引き延ばした後で、言葉に窮してしまった。そのとき彼が目をとめたのは、階廊の下にいた私であった。そして、私を見て、こう叫んだ。「少年よ。イエス・キリストを仰ぎ見よ。見よ！ 見よ！ 見よ！ 仰ぎ見さえすれば生きるのだ」。その瞬間、私は救いの道を理解した。他に何を云われたかは覚えていない。青銅の蛇が高く上げられたとき、人々はそれを見さえすれば癒されたが、私も同じであった。

1848年の暮れも押し迫った頃（あるいは1849年の年頭）数えて十五歳の時であったと。面白い話だと思います。そして、信じるというのはそういうことだとも思うのです。

私は、信仰に迷っている人に、時に、まずは信じてみたらいいといいます。ダメだったら、留めるわけでもないし、私たちの教会は、あなたを強制するシステムも持っていないのだから、いつでもやめればいいというのです。まずは信じたらと。まずは仰ぎ見る。天地万物を創造して下さった神を信じる。イエス・キリストを送り、罪を、底の底まで深みの深みまでゆるし解決して下さる方を信じる。ただ信じる。そうして見て欲しいと。人生は、案外、そこから変わるかも知れないと。

**「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神だ。ほかにはいない。」** どうぞ、そうしてみたいとおもいます。そうして、神の子どもの特権、神と共に歩む素晴らしさを体験して欲しいと思います。